

今、先生が困っていること、悩んでいること

《お話：石澤憲三さん》

1. 今、学校はどうなっているのか

●パターン化

ほとんどの学校が 20 代 30 代の教師ばかりです。50 代の教師がほんの少しいるという状況。一頃と雰囲気も教師の顔ぶれもガラッと変わっています。それは決してプラスでもマイナスでもないのだけれど、何が変わったかということ子どもへの接し方です。何でもパターン化しています。子どもが職員室に入ってくる時に、「〇〇です。こういう用で来ました」と言う。そして「はいどうぞ」と言われて入ってくる。全部こういうパターン。どこへ行っても同じ。授業の初めには、「きをつけ。これから一時間目の授業を始めます。礼」と言うのにプラスして、子どもたちは全員そろって「お願いします」と言うんです。授業の終わりには、「これで授業を終わります」と日直が言うと、「ありがとうございました」と全員が声をそろえて言う。これっておかしい、私は新採用の先生に言って、そういうことをさせないようにしていたのですが、そういうアドバイスを受け入れない先生もいました。なんでやるかと言うと、皆やっているからなんです。学校全体がそういうパターンになっている。



授業の中身もすごいパターン化している。発表の仕方というのが教室に掲示されている。おそらく松戸市内のどの学校、どの教室にも掲示されているのではないかな。

「私の考えは～です」とまず結論を言う。そして「その訳は～だからです」とその理由を言う。「〇〇さんに賛成です。その訳は～だからです」「〇〇さんにつけたします。付け足すことは～です」こんなふうにパターン化されている。

授業の中身もパターン化されているから、子どもがほんとうに興味を持つ中身で引っ張るといった感じではなく、指導書に書いてある通りの授業をする。いわゆる赤刷りと言われている、授業の流れまで詳しく書いてあるような指導書を利用するということが多くなっている。

パターン化というのは、どこから始まったのか。大学でそういう教わり方をしているのではないかな。また、新採研修（新任者研修）があるのですが、ここでもそういう指導がされている。最近はまだ新採研修を受けていない新採教員もこのような指導をする。研修で教わったからやっているという感じではない。もしかしたらその先生たちが子どもの頃に、そういう指導のされ方をした人もいるのかな。そのくらいパターン化が進んでいる。

教師のデメリットは何かというと、誰であっても指導しやすいということ。そのパターンに乗らない子がいたら、「もう一回やり直し」と誰でも言えてしまう。統一した指導が全校でできる。指導を徹底するということで全部パターン化してしまう。校長が、自分の学校の方針でやりますと言っているわけではない。松戸市内の小中学校の全部で行われてい

る。一人の先生の話ではなく、全部だから怖い。

●「厳罰」主義

子どもが何か失敗したら、担任だけでなく最近では学年主任と一緒にすることも多いのだが、大人に囲まれて厳しく指導される。そうやって怖さで指導する。いじめがあろうものなら、教師集団でワッと袋叩きにするような感じの指導をする。いじめをした子へ見せしめ的な強い指導をする。「ごめんなさい、すみません」と言わない限りは徹底しますから、子どもは早く「ごめんなさい、もうしません」と言わされてしまう。そういう指導ができる教員が指導力があると言われる。

子どもたちが荒れている時、こういう厳しい指導をしないと荒れを抑えることはできないと考えている。荒れを抑えるという発想になれば、どれだけ強い力で抑えるかということになる。どんどんエスカレートしていく。なぜ子どもたちが荒れるのかという悩み方をしなくなってしまう。

「いじめ」ゼロ運動と言って、毎月アンケートをとっている。それを教育委員会に提出している。毎月アンケートをとって、それを集計するのは大変な作業。

例えば「物を隠されたことがありますか」という質問、それに対し①ない②時々ある③しょっちゅうある、いつもあるなどの回答にしるしをつける。3つ目の項目に丸がついている場合は、一人ひとり呼び出してチェックする。これは結構大変な仕事です。でも、先生たちは疑問なくやるようになってしまっている。

今、松戸市の売りとなっているのはQ U調査。Q Uというのは、子どもにアンケートをとって、学級の分析をする。クラスの間関係などを調べる。この調査をすると教師は結構ショックを受ける。これは教師のやる気をそぐ調査だという人もいる。この調査を年2回行う。2回目は1回目より良い結果を出さなくてはならないから、教師は子どもたちの顔色を窺うような対応をしてしまう。松戸市は、この調査によっていじめがなくなり、子どもたちが学校を好きになるという発想で行っている。

QUESTIONNAIRE-UTILITIES

(楽しい学校生活を送るためのアンケート)の略。

学級集団の状態や、子ども一人一人の意欲・満足感などを測定できるとされる。

●小学校の部活

神奈川・埼玉・東京などでは小学校で部活をやっていません。全面的に否定するわけではないが、勝利至上主義・成績主義の部活は問題だと思う。

長時間・長期間化する練習。今はほとんどの学校で朝練をしています。春は球技大会、夏は水泳と陸上。その後は陸上。陸上大会が終わるとまた球技大会へ向けての部活。全体として年間を通じて部活を行っている。プラスバンドも年間を通じて行う。

子どもを指導する時、部活は若い教師にとって楽なパターン。部活の時、子どもたちは先生の言うことを聞く。指導が指導として通るからすごく気持ちがいい。だから夢中になっていく。子どもたちは大学の体育会系と同じ態度をとる。とても礼儀正しい。

●職員会議は完璧に伝達の間。議論することはほとんどない。意見が出なくて職員会議が早く終わる学校がいい学校と、平然と言い放つ管理職もいる。だから長くなると、この学校

おかしいと言う。そうすると皆だんだん意見が言えなくなる。特に若い教師は。もの言わない教師がどんどん増えていく。

- 長時間過密労働が常態化した学校。朝7時から夜8時、9時までが当たり前。土日出勤も当たり前。

◇それってブラック企業みたいですね。それで非正規の教職員も多くなって…。教師の待遇は非常によくはないし、教員の採用試験を受ける人が少なくなって、倍率も低くなっているそうだ。尾木直樹さんが「競争倍率が低くなると、採用された教員の質が確保できないと。ある程度の競争率を経て先生になってこないと言っている」と言っていました。競争倍率は最低3倍ないとだめだと。大阪の教員採用試験の倍率は完全にアウトだと言っています。それから、非正規の先生たちの実態は民間のブラック企業と同じで、とても深刻な状況。

退勤時間は本来4時50分。でも、夕方5時半、6時から学年会議がある。考えられないことだが、これが当たり前になっている。残業手当はつかないですよ。サービス残業です。

◇残業手当を出せば、こういう過剰な働き方は解消されるだろうと言われていますね。

これも早急に解決しないといけない問題ですよ。市の教育委員会は教員の仕事を減らすためにICTの導入をしていると言っているが、それによってさらに仕事量が増えている。

ICT化で通知表がかなりパターン化される。コピー&ペーストですよ。この子はこのパターンだなと貼り付けていく。そういうことができちゃうようになっている。

- 全国「学力テスト」が見えないガン

今、市内のどの学校でも「学力向上」対策を行っている。各学校はかなり意識して全国平均より高いとか、低いとか。そればかり気にしている。市教委はそれほど指導していないけれど、校長はそう。

秋田県で教員をしている知人との電話で、「今年も秋田県学力テストの結果トップだったね」と言うと、「秋田県の平均を上回るか、そうでないかが分かれ目。平均を下回った学校は教育委員会の徹底した指導が入る。学校は平均以上行くために徹底的に子どもたちをたたか」と悲鳴のような返事。トップの座を守るために秋田県は必死になっている。

秋田県で成績を上げるために徹底的にやっているのは、過去問勉強。3月に入ると過去問ばかりやる。

松戸は、小学校2年生以上のすべての学年で有料の学力テストをやっている（父母負担金で徴収されている）。おそらくやっていない学校はないだろう。1教科300円くらい。国語と算数2教科。テストを受けると、一人一人の結果と分析を示した個票が返ってくる。どの子を見ても大して変わらないことが書いてある。これでプラスになるのかなと思う。「こんなテストを受けても意味がない」という意見を言うと、学校は、このテストを受けたことを意味あるものにしてほしいと言う。「結果を分析して、その分析に基づいた授業を構築するように、各学年計画を立ててください」と。意見を言ったばかりに余計な仕事が増え



てしまう。そうはいつでも、全然活用してない。このテストは4月に受けて6月に結果が来る。それを分析して授業に生かせと言っても、そんな暇はない。今の授業を進めるのに精いっぱい。結局学力テストはやりっぱなし。それが現状。これは全国学力調査も同じこと。分析すると言っても、どこの学校も通り一遍の分析しかできない。それを授業に生かせと言ったって、できやしない。

どうやったら子どもたちが食いついてくるのかという授業を組み立てるのに時間をかけた方がいいんです。

◇しかも有料ですよ。ただでさえ、ドリルや普通のテストだって父母負担。更に有料の学力テストをやるというのは、父母負担がどんどん増えていく。

●若手教師の研修会

いろんな呼び方がありますが、今若手研と言われていています。強制ではない。やってもやらなくてもいいのですが、今どこの学校でも若手研をやっています。新採の先生は必ず「道徳」の授業を公開しなくてはならない。若手研に所属している人は教師になってほしい5年未満（10年未満の学校もある）。若手研に加えてそれとは別の校内研修もあるので、研修づくめ。若手研で授業公開もしなくてはならないし、別の校内研修の授業も見なくてはならない。若手研の先生が8人いたら、8回の授業を見なくてはならない。8回の授業を見たら、8回放課後集まってその授業の総括の勉強会をしなくてはならない。一人2回になるとそれが倍になる。それ以外に新採用の先生方の新採研というものもある。各学年でやる校内研もあります。この校内研は全員授業と言っている学校が増えています。校内研の授業をやる時は、同じ学年の他のクラスで事前授業をしなくてはならない。自分のクラスの授業が本番。その事前授業も見に行かなくてはならない。その時は、自分のクラスの授業はできない。その間子どもたちは自習。研修が一時期に集中すると（2学期が多い）、どこの学校も自習の多いこと！それが実態。

研修づくめで、若手は年中指導案作り。指導案をつくると、ここを直せとダメ出しが入り、遅くまで学校に居残って、ひどいときは泊まり込みになる。これに明け暮れている。指導案というのは、その人が自分で授業を組み立てていくための、自分のための案。人に見せるための案ではない。その案を土台にして自分が授業を進めていく、一つの手立て。それが今は、その指導案がすべて。指導案作りは半端じゃない。その指導案は、まず教科主任が目を通し、教務主任が目を通し、教頭、校長が目を通す。ダメ出しがいっぱいでる。研修の時間は新採研以外は誰も教室に入りませんから、子どもたちだけで自習している。

●「モンスターペアレンツ」

学校に対する風当たりは強くなっている。・学校へ行かせない・担任を変えろ・文書で謝罪しろ・訴える（まず市教委へ訴える。訴訟ということも口にすることもある）、こういう保護者が増えてきている。少なくとも2件、3件どこの学校も抱えている。最近は担任が直接対応しないようにしている。校長、教頭が直接話すということになっている。

保護者が怒って当然という場合もあるのですが、いじめの問題や子ども同士のトラブルの処理の問題、子どもが悪さした時の教師の対応の仕方、そういうことです。時には教師が子どもの人権にかかわるような言い方をしてしまうこともある。一昔前は、目をつぶる親も多かったのですが、今はそういうことをキャッチしたら、徹底して闘う人が多くなっ

てきている。

◇子どもの人権を傷つけられたら親としては当然表明するのは当たり前。それがどうしてこういう形で出てしまうのかということ、親もどういう対応すべきかということを知らない。だからいきなり教育委員会へ行ってしまう。

やはり信頼関係ができていないんです。「先生、うちの子も悪かったけど、先生もそんな言い方はないでしょう」と担任に言えばいいのに、そういう人間関係ができていないから、「何やっているんだ」と直接教頭・校長へ行く。その時、教頭・校長がしっかり謝ればいいんだけど、高飛車に出る対応をしてしまう時がある。そうしたら怒るのは当然。一概に親を責めることはできない。最終的に親と教師で手をつなぎながらわが子を何とかしていこうという地点に立てればいいのだけれど、それがなかなか難しい。

それがなぜできないのか。教師が保護者会を毛嫌いしている。そこが話し合いの場、子育ての経験をお互いに交流し合う場にしようという意識で取り組まないで、教師が一方的にしゃべるという展開で終わらせようとしてしまう。一方的に教師が、この間あった子どもの様子を伝えて、親から何も出なければ保護者会はそれで終わってしまう。それでは信頼関係生まれえない。これでは何かあった時に、親はちょっと担任の先生に相談しようかなとはならない。

◇今の懇談会は公開個人面談みたい。「うちの子は～なんです」と親が先生に話し、先生がそれに答える。その話が出席者全員に広がればいいのだけれど、広がらずにまた次の人が「うちの子は～なんです」と話す。親も先生も懇談会をどのようにやればよいか、知らない、わからない。先生も親もPTAとは何かがわかっていない。

◇先生も忙しいのだろうけれど、忙しくてやってほしいのは、PTA研修。あとでお願いしようかと思っていたのですが、先生を対象としたPTA学習講座を松教組と松P研との共催でやれないかなと思っています。

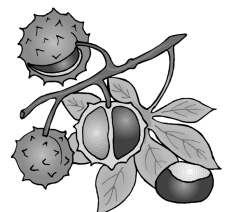
◇せめて学級懇談会のやり方とか、クラスでのとりくみを先生たちに学んでほしいなと思います。

◇学級PTAが充実していると、PTA全体も充実してくる。PTAの委員もすぐ決まる。本当に学級PTAが大事。

●今、学校の中にはいろいろな雇用形態の先生方が混在している。

- ・ 時給 800 円の人—教員免許をもたない事務職とか補助の人（車いすの子どもの補助などを行う）コンビニの高校生の時給と変わらない。
- ・ 時給 1400 円の人—教員免許を持つ市の講師。たとえばなかよし学級の補助に入っている人。常勤です。パートですけど。
- ・ 非常勤講師—その週の何日間、何時間だけという人。だいたい県採用。
- ・ 常勤講師—これも県採用
- ・ 再任用—退職した教員
- ・ 正規採用—今、8割ぐらいですね。

例えば 1 つの学校に 40 人の教職員がいると、2 割が講師だとすると 8 人。やはり多いですね。正規採用でない教職員の中でも（待遇に）格差がある。ある年配の男性は週に 2.5 のパート。時給 800 円なので生



活できないから、夜病院で事務の仕事をしている。学校の長期休暇の時は、全く収入がないし、福利厚生もない。もちろんボーナスもない。共済年金もない。

今、制度として、妊娠中の先生の代わりに体育の授業をする体育代替講師を置けるという制度ができた。しかし、なり手がいない。時給 1400 円として週 3 時間の授業で週 8000 円弱。そして 4 か月だけ。なり手がいないの当たり前。制度としてある以上必要に応じて派遣できるようプールしておいて、必要がない時にも生活の保障をちゃんとしてあげないと、やる人いないです。

2. 競争教育から抜け出さない限り悪循環は収まらない

茨城県美浦村の教育長の門脇厚司さん（元筑波学院大学長）は「学力向上路線からの離脱宣言」をして、今の学力テスト体制から抜け出すと宣言しました。一度お話を聞きたいと思っています。

橋下大阪市長の「教育改革」は悪い方の典型です。まず、全国学力テストの学校別成績公表、小中学校の学校選択制、民間人校長の大量採用。この民間校長は次々に不祥事を起こしています。つい 1 週間前に出ていたのは、経歴詐称。それから土曜授業の導入。小学校低学年からの英語教育。こういうことをやっている。それでどうなったか。大阪市に採用された教師は採用されたにもかかわらず、次に他の県を受けて異動していく。教師経験のある人が他の県を受けるとちょっと優遇されるから。大阪は倍率低いですから。

3. 安倍政権の危険な「教育改革」がどんどん実現

上記のような状況の根っこにあるのが安倍政権の「教育改革」。第一次安倍政権で教育基本法を変え、第二次になって首長が教育方針を決めるというような地教行法の改悪が行われ、大学も学長の権限を強化して教授会の自治もどんどん剥奪されていく。この間、ようやくマスコミでも触れられるようになったのが道徳の教科化の問題。それから指導要領の指導書で歴史認識を変えている。そうすると指導要領で触れていなくても、指導書で縛って、従軍慰安婦問題に触れさせないようにしている。

そんなことがずっと続いて、これが根っこにあって、今の学校が息苦しい場所になっている。子どもとドロドロしながらも、一緒に汗かいて、子どもが伸びていくことが教師の喜びになのだけれど、子どもたちをまるでもののように扱ってしまうような、子どものことを「使える」「使えない」というやり取りが職員室の中で行われる。本当はそんなことが教師の喜びではないのだが。

4. あるべき教師の姿 親の姿 教育行政の姿

私が新任の頃は、親と先生の関係も今とはずいぶん違っていた。私が失敗しても「先生、いいよ」と親が言ってくれた。親の方がいろいろと学級活動をセットしてくれた。いろいろ教えられました。本当に助けられました。親が下支えして、先生の力が発揮できるような状況を作ってくれた。これが親の姿だと思う。そのおかげで私も自信をもって子どもに対応できる。それが子どもにとっても安心感になり、親にとっても安心感になる。いい流れができる。それが出来上がってくると、地域の力があるから、地域との結びつきもできてくる。そういうふうに親が育ててくれた。

◇そういう時は、親同士の関係もいいのじゃないかな。親同士で育ちあえる。昔と同じよ

うに今はできないかもしれない。でも違った形で、親と先生の関係、親同士の関係を工夫してつくっていくことはできるはず。

◇子どもの貧困の状況というのは、先生にはなかなか見えてこないと思う。高校進学時に、経済的理由で高校に進めないということで初めて貧困の状況に気づく。今、家庭訪問もやらないし、地域の中のつながりも弱いし…。でも親たちからの情報で、貧困の問題を抱える子どもの状況を先生が気付くということもあると思う。学校で解決する問題ではないけれど、子どもの状況をつかむことは大事だと思う。子どもが荒れている原因がそこにあるかもしれない。パターン化した対応や厳罰主義では何の解決にもならない。

◇どんどん父母負担を増やしているが、今は給食費を無料化した方がいいような状況にある。

小・中学校の給食費を無料化した自治体
山口県和木町、茨城県大子町、群馬県南牧村、兵庫県相生市、北海道三笠市（小のみ）、群馬県上野村、長野県王滝町、沖縄県嘉手納町、埼玉県滑川町、秋田県八郎潟町、栃木県大田原市、山梨県早川町、山梨県丹波山村など、近年増えている。

学校というのは、親が「これはおかしいのではないか」と言えば言うほど、変わる可能性がある。それが今は逆。部活の場合は親の方が一生懸命。それに対して学校は「それはやりすぎです」と言えない。そこには学校選択制の問題がある。

今、県の行政も市の行政も、学級実践に介入してきている。先ほど言ったQ-U調査。学級の分析は本来学級担任が責任をもって、いろんな人間関係を把握してやるもの。ところが行政はこれを使ってやりなさいと。道徳はこれを使ってやりなさいと。行政は教育環境を整えることが本来の仕事のはず。旧教育基本法では教育の中身に口を出さない、行政は教育環境を整えることと徹底していた。ところが、最近は環境を整えるより、まず中身に口を出す。これは行政としての姿ではない。子どもたちが学習できる環境を整えるというところに徹するべき。

◇前の教育委員長の内藤さんが、教育委員会会議の時に「先生を応援するような教育委員会でありたい」というようなことをよくおっしゃっていたが、松戸市の教育委員会が現場の先生たちががんばれるような施策をとってと私たち松P研も要望していった方がいいですね。義務教育費の無償なども要望しながら、教育委員会が担う役割を、環境整備に努めてほしいということ働きかけていった方がいいですね。

（まとめ：浅井）